

源信における善と悪

島 義 徳

(高田短期大学)

仏教における善と悪という問題を考える場合、二つの見方ができるとされている。一つは善悪を世間的、倫理的な立場から見たものであり、もう一つは善悪を出世間的、第一義的な立場から見たものである。世間的な倫理的善悪は相対的な善悪であり、因果業報説の上から論ぜられるものである。それによれば未来に幸福の果報をもたらすものが善であり、反対に未来に非福不幸の果を引くものが悪とされる。その善悪は有漏の輪廻界に属するものである。これに対して第一義的な善悪は、相対的な善悪を超えて絶対的な最高の善を求めるものであり、輪廻を超えた、無漏出世間に属するものである。すなわち、悟りという理想の涅槃に向うものは善であり、これに反するものは悪とされる。従って相対的な世俗善は輪廻を超えるものでなく、悟りに向うものでないから第一義的な立場からは善とはいえない⁽¹⁾なる。

善悪を世間的、倫理的な立場から説いたものとして七仏通誠偈⁽²⁾をあげることができる。

「すべての悪しきことをなさず、善いことを行ない自己の心を淨めること、これが諸の仏の教えである」

(『ダンマパダ』一八三)

原始仏教の教える実践は道徳的に悪い行為を行わないで心を浄めることである。そこで人々は癡惡修善に努めなければならない。

「悪いことをした人は、この世で憂え、来世でも憂え、ふたつのところで共に憂える。かれは自分の行為が汚れているのを見て、憂え悩む。」（『ダンマパダ』一五）

「善いことをした人はこの世で喜び、来世でも喜び、ふたつのところで共に喜ぶ。かれは自分の行為が浄らかなのを見て、喜び、楽しむ。」（『ダンマパダ』一六）

善惡の業因が樂苦の業果をもたらす。

「悪いことをなす者は、この世では悔いに悩み、来世でも悔いに悩み、ふたつのところで悔いに悩む。へわたくしは悪いことをしました」といって悔いに悩み、苦難のところ（＝地獄など）におもむいて（罪のむくいを受け）さらに悩む。」（『ダンマパダ』一七）

「善いことをなす者は、この世で歓喜し、来世でも歓喜し、ふたつのところで共に歓喜する。へわたしは善いことをしました」といって歓喜し、幸あるところ（＝天の世界）におもむいて、さらに喜ぶ。」（『ダンマパダ』一八）さらに、善惡の超越が説かれている。

「心が煩惱に汚されることなく、おもいが乱れることなく、善惡のはからいを捨てて、目ざめている人には何も恐れることがない。」（『ダンマパダ』三九）

「この世の禍福のいずれにも執着することなく憂いなく、汚れなく、清らかな人、——かれをわれわれはへバラモン」と呼ぶ。」（『ダンマパダ』四一二）

最初期の仏教においては執着を離れ、相対立する二つのものにとられぬという立場に立っていたので、善惡の対立をも超えると考えられていた。癡惡修善の教説が世間的、倫理的な立場で説かれたものとすれば、出世間的、宗教的な立場からこれを超える思想が表明されているのである。

「或る人々は（人の）胎に宿り、惡をなした者どもは地獄に墮ち、行ないの良い人々は天におもむき、汚れの無い人々は全きやすらぎ（涅槃）に入る。」（『ダンマパダ』一二六）

ここには世間的立場において行われる善は出世間的立場においては捨てられるべき有漏の善であることが明確に説かれている。善惡を善惡相對のものとする見方ではなく、善惡を超えた最高の善（悟り）が求められている。この『ダンマパダ』一二六には、ある人々は人間として生まれ、惡行者は地獄に、善行者は天界におもむくという輪廻の世界と、無漏の者は涅槃にいたるという悟りの世界との、二つの世界があることを説いている。そしてこの二つの世界は、源信が『往生要集』の厭離穢土 欣求淨土に論じている六道輪廻の世界と極樂淨土にも見ることができる。

『往生要集』大文第一には次のように述べられている。⁽³⁾

「厭離穢土とは、それ三界は安きことなし、最も厭離すべし。今その相を明さば、惣べて七種あり。一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天、七には惣結なり。」（二一頁）

源信は『往生要集』十門のまず最初に六道輪廻の世界を取り上げる。すなわち、この現実の世界を厭い離れようとするために、いかに地獄からはじまる六道とか六惡趣とよばれる世界が苦しく、汚きたなく、いやな世界であるかが説かれる。なぜならば、われわれがこの世界に執着している限り、極樂に往生したいという考えを起こすはずがないか

らである。

インド仏教から中国の天台教学に至るまでの伝統においては地獄と極楽とを特別に対比することは起こらなかった。ところがわれわれ日本人の間では地獄と極楽を対比的に表現することが定着している。わが国において地獄と極楽がよく対にされるのは、恐らく『往生要集』の影響であろうと言われている。⁽⁴⁾もちろん、源信自身は六道の一つとして地獄を詳細に語っており、その凄惨な描写は初めて読む者に強烈な印象を与えたであろう。『往生要集』には一般的にいつて地獄・極楽を説いた書というイメージが強い。厭離穢土から受ける地獄描写の鮮烈な印象、欣求淨土で説かれる淨土の楽しみの数々、そうしたものが地獄と極楽を対置的に捉える結果をもたらしたとされる。

六道よりも、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五つの生存領域（五道または五趣）を立てる説の方がその成立が古く、しかもこのように生存領域を五つにまとめるようになったのは、原始仏教聖典においてはかなり後のことであるとされる。⁽⁵⁾先述の『ダンマパダ』一二六に見られる説はこれよりもさらに古い段階を示しているのであろうか。

『往生要集』は六道の中の第一に最も下の世界とされる地獄から述べている。

『第一に、地獄にもまた分ちて八となす。一には等活、二には黒繩、三には衆合、四には叫喚、六には焦熱、七には大焦熱、八には無間なり。』（一一頁）

ここには八熱地獄とよばれるものの名が列挙され、以下その一つ一つが詳しく説明されている。源信は八熱地獄のほかに八寒地獄があることを地獄の説明の終りの部分で述べているが、それ以上のことは語っていない。

地獄とは地下の牢獄の意で、悪人が死後に生まれて苦しみを受ける場所である。地獄の排列の仕方において、その位置が地中深くなればなる程、その広さと受ける苦しみの量が増大し、かつ罪人がそこに居なければならぬ期間も

増大する。地獄とそこに堕ちる罪について次のように述べている。すなわち、

等活地獄は殺生の罪を犯した者が堕ち、黒繩地獄は殺生と偷盜の罪を犯した者が堕ち、衆合地獄は殺生・偷盜・邪淫の罪を犯した者が堕ちる。叫喚地獄は殺生・偷盜・邪淫・飲酒の罪を犯した者が堕ち、大叫喚地獄は殺生・偷盜・邪淫・飲酒・妄語の罪を犯した者が堕ちる。焦熱地獄は大叫喚地獄の五つの罪に邪見を加え、大焦熱地獄はさらに淨戒の尼を汚^{けが}した罪を加えている。最後の無間地獄については

「八に阿鼻地獄とは、大焦熱の下、欲界の最底の処にあり。」(二三頁)として

「五逆罪を造り、因果を撥無し(因果の道理を否定する)、大乘を誹謗し、四重(殺・盜・淫・妄の罪)を犯し、虚しく信施を食へる者(不当に受けた信者の布施を食した者)、この中に堕つ。」(二六頁)

とこの無間地獄に堕ちる罪はその他の地獄の場合と比べて罪の数の多さにおいて突出しており、最大の極重悪人が堕ちるとされている。なお、八熱地獄の各々に十六の付属の地獄があって、それぞれの中に堕ちる罪についてもさらに具体的に述べられている。

『往生要集』に表現されている地獄の状況は、空想的で、作り話であるという印象を受ける。源信自身、地獄の实在を信じていたかどうか判らないが、地獄はわれわれを離れたところにあるのではなくて、現実においてわれわれの生きているすがたを如実に表現したものではなかろうか。⁽⁶⁾

「厭離穢土」は六道全体を扱っているが、地獄を説くことだけでその大半の役割を終えたと言える。地獄を来世と設定することによって、地獄が極楽か、その二者択一をわれわれに迫っている。

次に「餓鬼」とは仏教では一般に飢えて食物を待つ死者のことであると考えられた。六道の一つである餓鬼道に住む。彼らは悪業の報いとして餓鬼道に堕ちた亡者であり、飢渴に苦しむ。すなわち、福德のない者が陥り、常に飢え、渇き、苦しみに悩まされて、たまたま食物を得てもこれを食べようとすると炎が発して食べることができないという。餓鬼はいわば欲求不満の人間の姿を表現している。⁽⁷⁾

『往生要集』には、餓鬼の世界には二つの住所があり、一つは地の下五百由旬の地点にある。いわゆる閻魔王の国である。今一つは人間界と天界との間にあると述べられているが、餓鬼とは何であるかの説明は無い。「この相、甚だ多し」（三〇頁）と、餓鬼の種類を数えたてて、鏤身、食吐、食気、食法、食水、惴望、海渚、食火炭、樹中住などの餓鬼が列挙されている。これらの餓鬼世界は人間の世の一ヶ月が一昼夜にあたる。年月を重ね、五百年をもってその寿命とする。「昔、名利を貪らんが為に不浄に説法せし者」（三〇頁）と、生前、名誉や利益をむさぼって、よこしまな気持を持って教えを説いた者とか、妻子に食べさせずに自分だけがおいしいものを食べた夫、人が苦勞して手に入れたものをだまして取った者、牢獄の看守長をして、罪人の食べものを取った者など、「慳貪と嫉妬の者」（三二頁）がその報いとしてこの餓鬼の世界に堕ちると述べている。

『往生要集』は畜生の世界にも二つの住所があり、主なものは海中に住み、一部は人間界や天界に住んでいる。細かく分けると三十四億もの種類があり、大きく分けると鳥類、獸類、虫類の三種類になるという。このような畜生たちは一中劫もの間、数限りない苦を受け、また色々と思いがけないことで殺される。こういった苦しみの数は多すぎて数えきれない。おろかで反省する心がなく、信者から施しを受けながら、その施しに対してお返しをしなかった者

がこのような報いを受ける。これらの畜生は浅ましい存在であり、互いに殺し合っているだけにすぎないということを強調している。源信の説明は極めて簡単で、いかなる経論も引用していない。⁽⁸⁾

阿修羅に関する『往生要集』の説明も簡単で、阿修羅の中でもすぐれた者は人間界の中心にある須弥山の北の大きな海に住み、劣った一部の者は、四大州の間にある山嶺の中に住んでいる。そして、その苦しみありさまだけが述べられていて、いかなる報いでこの世界に生まれるかについては全く触れていない。

次に『往生要集』は人間界を説明する。

「第五に、人道を明さば、略して三の相あり。審かに観察すべし。一には不浄の相、二には苦の相、三には無常の相なり。」(三四頁)

源信は人間の身体をこまかに観察、分析している。不浄と苦と無常の三つの見方から充分観察することによって、われわれがこよなく愛しているこの人間そのものが決して執着する価値のあるものではないとして、

「人道かくの如し、実に厭離すべし。」(四二頁)

源信は無常を説明する中で『大般涅槃經』を引用している。

「大經の偈に云く、

諸行は無常なり　これ生滅の法なり　生滅の滅し已れば　寂滅を樂となす

と。雪山の居士は全身を捨ててこの偈を得たり。」(四八頁)

雪山童子は、この偈を得るために、羅刹に自分の肉体を投げ出したことから、雪山偈と言われている。⁽⁹⁾

さらに『ウダーナヴァルガ』の系統の漢訳『出曜経』を引用する。

「この日已に過ぎぬれば 命即ち減少す 小水の魚の如し これ何の楽かあらん」⁽¹⁰⁾（三九頁）

また、『ダンマパダ』の系統の漢訳『法句譬喻经』をも引用する。

「空にもあらず海の中にもあらず 山石の間に入るにもあらず 地の方処として 脱^{のが}れ止まりて死を受けざるものあることなし」⁽¹¹⁾（四〇頁）

源信は人間そのものを見つめたのである。人間の生は死に裏づけられている。生あるものは心ず死ななければならぬ。死は人々の欲しないものであるから、死に裏づけられているはずのものである生存は苦しみであると言わねばならない。その真実のすがたは無常であり、苦しみである。そうしてこの厭わしいすがたから脱^{のが}れるにはひとえに仏の教えに帰依すべきであるという。⁽¹²⁾

穢土の中の最後に天界が述べられる。

「第六に、天道を明さば三あり。一には欲界、二には色界、三には無色界なり。その相既に広くして、具^{つぎ}さには述べべきこと難し。」（四一頁）

天界はあくまでも輪廻の世界であって、人間界よりはさまざまな点で、はるかに苦が少なく楽が多いのであるが、決して理想の世界でも、願い求むべき世界でもない。しかも、この世界での楽しさが大きければ大きいほどそこを離れるときの苦しみは大きく、その苦は地獄の苦の十六倍以上にもなる。また、無色界の最高天にいる天人であっても、阿鼻地獄に堕ちることにもなる。

「当に知るべし、天上もまた楽ふべからざることを。」（四二頁）

「第七に惣じて厭相を結ぶ。」（四二頁）

として、以上、地獄から天界までの一つ一つをつぶさに眺めてきた上で、最後に、全体としてこういった穢土を厭うべきことが述べられている。

源信は『大般涅槃經』を引用する。

「人趣に生るる者は爪の上の土の如し。三途に墮つる者は十方の土の如し。」（四四頁）

人間世界に生まれる者の数は、爪の上にのせた土のように少なく、三つの惡世界に生まれる者の数は、世界中の土を集めたほど教知れぬくらい多い。

さらに、『法華經』の偈に云くとして、

「無量無數劫にも この法を聞くことまた難し 能くこの法を聴く者あらば この人も亦また難し」（四四頁）

限らない時間の中においても、この教えを聞くことはむずかしい。この教えを充分に理解するのは、さらにむずかしい。

このようなはかり知れない生死の間に人間として生まれてくるのは、はなはだ困難なことであり、よしんば人間として生まれ得ても仏の教えに出会うことはむずかしく、たとえ仏の教えに出会っても、それを信ずることはさらにむずかしいのである。

「しかるに今、たまたまこれ等の縁を具せり。当に知るべし、苦海を離れて浄土に往生すべきは、ただ今生のみにあることを。」（四四頁）。

ところが幸いにも、今上に述べたような機会がやって来た。そこで苦しい世界を離れて浄土に往生するのは、今の世こそ絶好の機会であることを忘れるべきではない。

「願はくはもろもろの行者、疾く厭離の心を生じて速かに出要の路に随へ。宝の山に入りて手を空しくして帰ることなかれ。」（四四頁）

どうか、すべての修行者たちは、一日も早くこの迷いの世界を離れて、悟りに向かう心を起こすようにして下さい。せつかく宝の山に入れながら、何も持たずに帰ってくるようなことにならないようにして欲しいものである。

ここに語られているのは、源信の率直な心情であろう。『往生要集』の製作の意図がここにも述べられているといえよう。

『往生要集』は大文第五に助念の方法、念仏を修するための手助けとなる方法を説く。

「助念の方法とは、一目の羅^{あみ}は鳥を得ることあたわざれば、万術もて観念を助けて、往生の大事を成ずるなり。」

（一四三頁）

念仏をするときの助けとなる手段というのは、目が一つしかない網では鳥を捕えることができないので、あらゆる手段で観察を助けて、極楽往生という最も大切なことを達成するのである。

助念の方法は七つに分けられているが、その中止悪修善と懺悔衆罪とが述べられている。

止悪修善とは悪をとどめて善をなすことであり、七仏通誠偈を連想させる。戒律をたもつことが善であり、犯すことが悪ということを基本的立場として、十善、六波羅蜜などをはじめ、諸經典に説かれる種々な善と悪とが問答の中

で述べられて⁽¹³⁾いる。一例をあげると。

「第四に、止悪修善とは、観仏三昧経に云く、

この念仏三昧、もし成就せんには五の因縁あり。一には戒を持ちて犯さず。二には邪見を起さず。三には憍慢を生ぜず。四には悲らず嫉まず。五には勇猛精進にして頭燃を救ふが如くす。この五事を行じて正しく諸仏の微妙の色身を念じ、心をして不退ならしめ、また当に大乘經典を誦誦すべし。この功德を以て仏力を念ずるが故に、速疾に無量の諸仏を見たてまつることを得。」(一七三頁)

この念仏三昧を完成したい者は、次の五つのことをやる必要がある。一つには戒律をまもって犯さず、二つには誤った思想を起こさず、三つにはおごりたかぶらず、四つには怒らずねたまず、五つには勇力を出して頭上で燃えている火を消すように一生懸命努力することである。この五つを実践し、正しく仏たちのすぐれたお姿を心に想い、心の状態をそれより下げないようにして、大乘の經典を誦誦するのです。するとこの功德によって、仏の力を念ずることになるので、速やかに無数の仏たちを見ることができるよう。

次に、懺悔衆罪とは犯した罪を悔い改めるということである。懺悔とは罪を悔い告白して許しを請うことで悔過ともいわれるが、罪を犯したならば、懺悔するということは、すでに原始仏教以来行われている。自恣とか布薩という儀礼がそれである。自恣とは雨安居が終った最終の日に、修行僧らが互いに自己の犯した罪を告白し、懺悔して許しを乞うことである。比丘の布薩とは毎月二回、満月の日と新月の日に僧伽の比丘全員が一堂に集り、波羅提木叉という比丘の守るべき戒律の箇条を読みあげて罪を懺悔するものである。懺悔による罪の消滅は大乘仏教にもうけつがれている。

「第五に、懺悔衆罪とは、もし煩惱の為にその心を迷乱して禁戒を毀らんには、応に日を過ぎずして、懺悔を営み修すべし。大經の十九に云ふが如し。

もし罪を覆へば、罪則ち増長す。発露懺悔すれば、罪即ち消滅す。」（一八五頁）

もし煩惱のために心を乱して戒律を破るようなことがあったら、その日のうちに懺悔すべきです。『涅槃經』の卷十九に、へもし罪をかくすと罪はいよいよ大きくなるけれども、さらけ出して懺悔すれば罪はきえる」とある。

『涅槃經』によれば、父王を殺すという五逆罪の一つを犯し、無間地獄に墮ちることが間違いない阿闍世王が救われるきっかけになった重要なポイントは懺悔であり、慚愧であった。罪をつくって隠す人には煩惱がつきまとうが隠さない人には煩惱はつきまとわない。告白懺悔することにより煩惱がつかない。従って、もし罪をつくったら、それを隠してはいけない。隠さずに懺悔すれば罪は微薄になる、軽くなる。さらに慚愧を懷くならば罪は消滅する。それ故、阿闍世王の重罪も、心に慚愧をいただき、発露懺悔すれば罪が消滅すると説かれている。⁽¹⁴⁾

源信は『往生要集』大文第九、往生の諸行に、浄土に往生するための修行として念仏以外の行があることを述べている。

「大文第九に、往生の諸行を明さば、謂く、極樂を求むる者は、必ずしも念仏を専らにせず。すべからく余行を明しておのおのの樂欲に任すべし。」（二五四頁）

極樂を求める者は、必ずしも念仏するだけでよいというのではない。他の修行も行なって、各人の望むようにさせるべきである。

源信自身「往生の業には念仏を本となす」(一九四頁)と念仏一途の往生を説いてきたのに、諸行による往生の可能性を説く必要がどこにあるのか、このあたりにかれの生きた時代の限界というものが感じられると言われている。⁽¹⁵⁾

源信は往生の諸行を説明する中で『観無量寿経』の九品往生の文を挙げている。下品三生だけを取り上げると。

「下品上生とは、あるいは衆生ありて、もろもろの悪業を作らん。方等經典を誹謗せずといへども、かくの如き愚人、多くもろもろの悪法を造りて慚愧あることなけん。臨終に十二部経の首題の名字を聞き、及び合掌して南無阿弥陀仏と称ふ。

下品中生とは、或は衆生ありて、五戒・八戒及び具足戒を毀^{やぶ}り犯さん。かくの如き愚人、命終らんとする時、地獄の衆火、一時に俱に至らん。善知識の、大慈悲を以て、為に阿弥陀仏の十力・威徳を説き、広くかの仏の光明の神力を説き、また戒・定・慧・解脱・知見を讃ふるに遇はん。この人聞き已りて、八十億劫の生死の罪を除く。下品下生とは、或は衆生ありて、不善業を作り、五逆・十惡、もろもろの不善を具せん。かくの如きの愚人、悪業を以ての故に、応に惡道に墮すべし。命終の時に臨みて、善知識に遇ひ、仏を念ずることあたはずといへども、ただ至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無無量寿仏と称へん。仏の名を称ふるが故に、念々の中に於て八十億劫の生死の罪を除く。」(二五八頁)

なぜここに下品三生のみを取り上げたかという点、

「下品の三生には別の階位なし。ただこれ具縛造惡の人なり。

明らけし、往生の人はその階に限りあることを。いづくんぞ、なほこれわれ等が分なりといふことを知らんや。」

と、源信が下品の三生をもって、われ等が分なりとしているからである。『源信伝』にも、源信が生前望むところは下品の蓮台で、それを己の分と考えるからだと説明したとあり、おそらく源信はその願いの通り、下品に生まれたのではないかと推定している。⁽¹⁶⁾

また、『往生要集』往生の諸行、第二、惣じて諸業を結ぶの文中に源信は往生の行業に十三の相を立てている。注目されるのは、その最後「十三には利養に染まざるなり」（二五九頁）と述べていることである。利養を求めることの誤りを『大集月藏分』や『仏藏経』に教証を求め、いかに「利養に染まざる」ことが大切であるかを強調している。ちなみに『涅槃経』にもとづいて、一闍提とは「利養を貪著する者」の謂であるとの説が出されている。⁽¹⁷⁾

源信は『往生要集』を完成した後、寛弘元年（一〇〇四年）五月、権少僧都に叙せられるも、翌年十二月、これを辞退し、元の一介の隠遁僧に戻っている。⁽¹⁸⁾

注

- (1) 水野弘元「社会悪」（『仏教思想2 悪』）三八七頁
- (2) 「諸悪莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸仏教」『ウダーナヴァルガ』第二十八章 悪 第一偈に対応する。（『ダンマパダ』『ウダーナヴァルガ』は中村 元訳『真理のことは 感興のことは』岩波書店を参照した。）
sarvapaṇasyākaraṇaṁ kuśalaśyopasaṁpadah /
svacittaparyavadanam etad buddhasya śāsanam // 1
- (3) 『往生要集』の本文は石田瑞麿『日本思想大系6 源信』（岩波書店）を引用した。現代語訳には、花山勝友訳『往生要集』（徳間書店）、及び川崎庸之編『源信』（中央公論社『日本の名著』4）所収を参照した。
- (4) 中村元『往生要集』一頁

- (5) 中村元『同』一七頁
- (6) 中村元『同』五二頁
- (7) 中村元『同』六三頁
- (8) 中村元『同』八四頁
- (9) 「無常偈」とも呼ぶ。『マハーバリニッバーナスッタント』には釈尊入滅の際に帝釈天がこの偈を詠じたとされている(中村元訳『ブッダ最後の旅』岩波文庫一六〇、一六一頁)。『ダンマパダ』には見当たらないが、『ウダーナヴァルガ』第一章の第三偈にある。
- anītyā bata saṃskāra utpādayyadharmīṇaḥ /
 utpādyā hi nirudhyante teṣāṃ vyupaśamaḥ sukham // 3
- (10) 『ウダーナヴァルガ』第一章第三三偈「ひとびとの命は昼夜に過ぎ去り、ますます滅って行く。——水の少ない所にいる魚のように。かれらにとって何の楽しみがあらうか。」
- (11) 「大空の中においても、大海の中においても山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにおいても死の脅威のない場所はない。」(『ダンマパダ』一二八)
- 源信は『ダンマパダ』系統の漢訳、維祇難等訳『法句経』二巻を知らなかったようである。『往生要集』に「法句経に云く」(九五頁)とあるが、これは同じ題名の『仏説法句経』のことである(中村元『往生要集』一四〇、一四一頁)。『出曜経』『法句譬喻経』を読んでいたことから、源信が恐ろしく博学な人であったことがうかがわれる。
- (12) 中村元『往生要集』九一頁
- (13) 花山勝友『往生要集』四三三頁
- (14) 拙稿「涅槃経と親鸞聖人」(『高田学報』七十九輯、一七、一八頁)
- (15) 石田瑞麿『浄土仏教の思想』第六巻、三〇七頁
- (16) 右に同じ、二四八、二四九頁
- (17) 望月良晃『大乘涅槃経の研究』一三頁
- (18) 石田瑞麿『浄土仏教の思想』第六巻、二三〇頁

